

平成16年の国立大学法人化を契機に、各大学は自らの存在意義と教育・研究の指向をあらためて問い直し、将来的にどのような戦略で展開を図っていくかを真剣に議論した。山形大学は、県内唯一の総合大学としての自負と責務から、「地域に根ざし世界を目指す」をスローガンに、地域立脚型大学を一つの柱とした。

そして同年7月、山形大学では一つの事務職員研修が行われた。これまで教員を下支えする役目だった事務職員から脱却し、法人化後は自ら考え行動することが求められるようになった。その研修として、事務職員が3人1組のグループで、2ヶ月間にわたって県内各地域に出向き、山形大学と各地域との連携策をまとめる「山形大学活性化プロジェクト」が実施された。

この研修の一参加者だった筆者は、最上地域の中心都市である新庄市を訪問した。旧制諸学校を母体とする山形大学は、県内3地域にキャンパスを持つことを強みとして、各地域との連携を深めてきた。しかし、最上地域には一切の教育・研究施設を持っていない。さらに、同地域は当時、高等教育機関が全くない「空白地域」でもあり、何らかの形で山形大学の足がかりを作りたいというのが、当初の狙いであった。

一方最上地域は、少子高齢化と産業の低迷に悩み、教育分野でも同地域の大学進学率は著しく低い。大学が身近になれば進学率を上げるのも難しく、大学誘致は、地域住民の長年の悲願であった。こうして両者は運命的に出会い、全国初のソフト型キャンパス構想（特定の施設を持たない）に発展した。

その後、最上地域の要望に応える形で検討が進められ、平成17年4月「山形大学エリアキャンパスもがみ」が産声を上げた。これまで約3年間、各市町村の熱心な協力で支えられ、エリアキャンパスもが



受講生たちのこの生き生きとした表情を見てください！

みの事業規模は、緩やかな拡大基調にある。エリアキャンパスもがみは、今や山形大学の地域連携の「顔」として、全国的にも大きな注目を集めている。大学の地域連携と言えば、工学部などが持つ研究のノウハウを産業に結びつける「産学連携」が一般的だが、エリアキャンパスもがみでは、学生の活力を活かした地域活性化と地域の人材育成に主眼を置いており、この点でも非常にユニークな手法となっている。

この中心的事業が、現地体験型授業「フィールドワークー共生の森もがみ」である。これは、全学部

バリューサイト VALUE SIGHT

地域全体が学びの場、 地域と大学がともに 未来に残る遺産を創造

山形大学「エリアキャンパスもがみ」は最上地域全域が大学のキャンパス。広々としたフィールドで学生は地域の達人から最上の文化・自然・伝統などを学び、また地域は学生との交流を通じ地域の遺産伝承となる人材育成に取り組む。地域と大学が真の連携に取り組む山形大学の挑戦がはじまっている。

の1年生が受講する教養教育の正規の科目で、毎回200名を超える学生が受講している。

これまでも最上地域では、豊かな自然・伝承文化・歴史的資産を活用した人材育成活動が行われてきた。最上地域はいま、どの地区も少子高齢化と過疎化に悩み、あと数年で地域の文化を伝承する人材がいなくなる集落も多い。長く受け継がれてきた伝承の灯火が消えていくのをながめているだけでいいのだろうか。それらの伝承の価値を学生の視点で再確認し、自らも体験し、受け継ぐために学生を送り込み、現地で実際に見て・触れて・感じる体験活動を通じて、人間的成長を図ることがこの授業の狙い

である。

この授業では教育プログラムの構築、講師や会場の手配までを、最上地域の各自治体スタッフが中心に行い、山形大学に提供する「寄付授業」となっている。このような授業が出来るのは休日返上で働いてくださる、各自治体スタッフの努力のたまものと言える。そして山形大学は、最上各地域から提供されるこれらの授業プログラムの一つひとつを、後世に受け継いでいくための「もがみ未来遺産」として顕彰している。

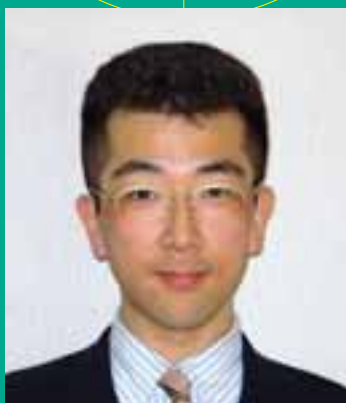
この授業に参加する学生は、1泊2日の活動を2

とができた。最後に行われた地域のお祭りで、学生達は地域の人々への感謝の気持ちを《自主的に》歌にして発表した。大学の構内では、授業中も平気で飲み物を飲み、携帯電話でメールを続ける学生が、たった4日間の学習を通じ、一回り大きくなって帰ってくる。そのあまりの成長ぶりに驚き、この授業が学生に与える影響の強さを実感する。

エリアキャンパスもがみには、もう一つ「地域の人材育成」という目的がある。これは地域子ども達に「大学」を直に感じてもらう機会づくりである。山形市のキャンパスと最上地域は、50キロも離れており、学生が日常的に入り込める環境にはない。しかし、このエリアキャンパスもがみを通じて、学生が機会あるごとに現地に出向いて活動し、そこに地域子ども達も入り込む。こうして地域子ども達が「大学」というものの存在を認識し、自分の将来像の中に位置付けるようになる。子ども達は立派に成長を遂げ、やがて優秀な人材として地域に戻ってくるだろう。すでに、エリアキャンパスもがみの一環として最上地域で行っている「大学祭」やグループワーク形式の「タウンミーティング」にも、多くの中高生が参加し「将来、山形大学に入りたい」「山形大学でまちづくりの研究をしたい」という嬉しい声も出ている。今すぐに効果は見えなくとも、最上地域の未来を背負う子ども達は、着実に成長を遂げている。

山形大学エリアキャンパスもがみは、最上地域の人々の手で生み出され、共に育み、その歩みを始めたばかりだ。この取組みを大きく育てていくことは、この地に山形大学が存在する意義を物語っているだろう。ようやく、少しずつ新しい構想も芽を出しつつある。いくつもの新しい木々が寄り添って、いつの日か「もがみ」の大きな森に成長してほしい。それほど遠くない日に、これが現実となる力をエリアキャンパスもがみは持っている。

最上



山形大学
エリアキャンパスもがみ
事務局

蜂屋 大八

回体験する。宿泊や食事に関する費用は、学生本人の負担である。活動内容は毎回レポートと感想文で提出し、学期の最後には大学でプレゼン形式の発表会を行う。いわゆる座学形式の講義と異なり、主体性の高いプログラムで、「単位を取る」ことだけを考えれば、この授業のハードルは高いが、その分達成度も高い。

ある1つの自治体で行われた授業の事例を紹介したい。学生らは現地に近づくに連れて人家が乏しくなり、見渡す限り山ばかりという状況に不安を感じていた。しかし、授業では生まれて初めての農作業を通じ、現地の驚くほど元気なお年寄りのパワーに圧倒されつつ、普段の生活では交流することのない年齢層の人々とふれ合い、農家へのホームステイや「もらい湯」を経験して、人の温かさを肌で感じるこ

■ 蜂屋 大八 (はちや・だいはち)

山形大学エリアキャンパスもがみ事務局担当。
山形大学高等教育研究企画センター。山形大学学務部
教育企画ユニット教育企画チームリーダー。
1969年山形市生まれ。山形大学卒業後、事務職員として山形大学に就職。放送大学大学院文化科学研究科・文化科学専攻・政策経営プログラム在学中。
〒990-8560 山形市小白川町1-4-12
TEL 023-628-4707・FAX 023-626-4720
E-mail k3cen@jm.kj.yamagata-u.ac.jp